三好文夫

# シャクシャインが哭く

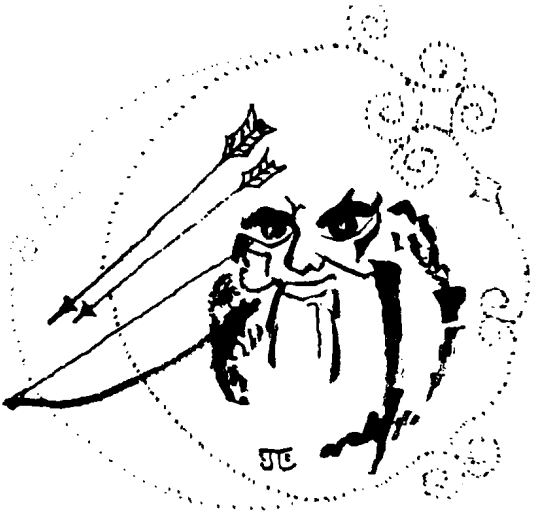
## シャクシャインが哭(な)く

寛文九年(1669)、風雪の北海道に展開された、和人の侵略に抵抗するアイヌの酋長・シャクシャインの蜂起！その英雄の大ロマンを再現し、アイヌ問題の核心を掘りおこす話題作。

潮出版社　680円

# シャクシャインが哭く

文夫



潮出版社

シャクシャインが哭く

昭和 47 年 9 月 20 日　印　刷
昭和 47 年 9 月 25 日　発　行

定価 680 円

著　者　三　好　文　夫

発行者　碓　井　昭　雄

東 京 都 新 宿 区 南 元 町 14—1

発行所　株式会社　潮　出　版　社

電話 (357) 7111(代) 振替東京61090

〒 160

装幀・床ヌブリ　印刷 公和印刷　製本 牧製本

落丁・乱丁本はお取替えいたします
© F. Miyoshi 1972 Printed in Japan

# シャクシャインが哭く

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# 1

いまにも初雪を散らつかせそうな気配の、低くたれこめた灰色の空が、そのまま暮れてしまって肌寒かった。

その夜わたしは、私立探偵社をやっている池内昭治に会ったのだが、それはあらかじめ考えていた事ではなかった。

出演者の都合でビデオ撮りが遅くなり、少々疲れたわたしは、帰りがけにどうしようかと迷い、しかしそんな時は結局、ひとりでに行きつけのバーに向ってしまうのだった。

多分に蒐集癖のある、そこの中年のバーテンが、わたしの前にウィスキーの水割りを置き、それから意味あり気にチョッキのポケットに手をさし込んだ。

「ははあ。またなにか、妙なものを見つけたようだね」

「妙なものは、ひどいですよ」

バーテンは眉をしかめてから、古めかしい懐中時計を大切そうにつまみ出して、わたしの鼻先まで差し出して見せた。
「掘り出しものですわ。英国製の時代ものでしてね。いまも正確に動いていますし、金側でございますからね」
と、捩子巻のキーまで出して得意がった。
〝金〟と聞いて、わたしはふと、幾日か前の池内君の電話を思い出したのだ。
やあ、と池内君は相変らず、こちらの都合にはお構いなく殆ど一方的によく喋った。
「おもしろい話があるのですよ。でもこれは、職務上の秘密事項なのだけど、きみにだけは漏らしておきたくてね。……ええと、何ていったかな。きみなら詳しいでしょう。有名なアイヌ酋長。三百年か以前、松前藩に反抗して争乱を起した首魁といわれる人物さ。日高の、静内町の……。そうそう、シャクシャイン。そのシャクシャインがねえ、時価数億円にのぼる砂金を埋蔵した事実を示す古文書があるのですよ。聞いたこと、ありますか。くわしく話しますよ。たまに一緒に飲みましょうや。もちろん、他には極秘ですよ。妻君元気なの。あ、そう、じゃ失敬」
池内君は、考えてみると学校時代もそうだったが、いつも気忙しげな男だった。あれで探偵などという商売がつとまるのかと思わせるのだが、もう十年も続けているところをみると、探偵社だとか興信所だとかいうところの客層は、案外単純なのかも知れなかった。
それはともかく、わたしはバーテンの金時計を眺めながら、わたしとしては信じがたいシャクシャインの財宝の話と、それだけはいかにも探偵らしい、大きな眼を、すばしこく動かしながら鼻をひくつかせて喋る池内君の顔を思い浮べて、あるいはいま頃、瓜実顔の女将のいる居酒屋あた

りで、好物のおでんを食っているかも知れないな、と思い、わたしは水割りを平らげてバーを出た。
外気はかなり冷え込んでいて、吐いた息がネオンのあかりに照らされて白く煙った。電車通りを渡って、瓜実顔の女将の店の暖簾を分けると、それは適中というより偶然というべきなのだが、池内君は既にほんのりと顔を染め、おでんの湯気を吹きながら地酒をかたむけていた。
「よお、よお！」
と、彼はわたしを振りかえった。
わたしは、覚悟してはいたものの、その居酒屋での池内君の独断はまるで迷惑なもので、今日のはこれがうまい、あれも良い、と、次々にわたしの前に皿を並べたてる。結局は、わたしが勘定させられるのだから、大いに食ってやろうと思うのだが、わたしはまた、どうもおでんが苦手なのだ。
「北海道も、こう冷え込みはじめると憂鬱だけど、おでんは一段とうまくなりますからねえ」
と、池内君は盃を干し、それから幾分声を潜めて言った。
「この前の、電話のことでしょう……」
「いやあ、別に。ここで飲む気になっただけで、偶然きみがいたわけさ」
胸のうちを見透かされたような、少々嫌な気分になって、わたしは言い逃れようとした。
「きみの局の番組で、アイヌに関したものは大抵、きみが手がけている事くらい、ぼくは知っていますよ。きみはこの頃、アイヌのことに、ずいぶん関心があるのでしょう」
「そんな事じゃないんだ。仕事ですからね」
と、わたしは曖昧にした。だが、やはり、シャクシャインの財宝という、甚だ奇抜なネタにひ

かれて、ここまでやって来たことはいなめないのだった。
民間放送の製作課に勤務するわたしが、はじめは何となく、いや、むしろ奇警を狙う恰好で、観光地のアイヌを扱い、全国ネットに流して得意がったりしていたのだったが、それに対して、一部のアイヌの人びとや、アイヌ文化を研究する人たちから、かなり激越な抗議を受けて、わたしは唖然としたのだった。
観光地のアイヌ人たちは、伝統の唄をうたい、舞い、旅行者にアイヌ民族の風俗や文化を紹介しているのだと言い、わたしもそう思い込んでいたのだったが、わたしへの抗議は、それは安直な見世物であり、彼らは偽アイヌである。偽アイヌたちは、愚劣な見世物を売りつけ、同時にアイヌ人への偏見をひろげ、差別の芽を育てているのにほかならないのだ、と言うのだった。
そして、そういう意見の方が、実は正しいのではないか、と、やがてわたしは思うようになった。
だが、自分はアイヌだ、と胸を張るアイヌは稀にしか存在しない。そのうえ、厳然とアイヌ人が主張されていたかと思えば、ある時不意に深い霧に吸いこまれるように、その主張は消滅したりする。『アイヌ』とは、〈我〉であり〈汝〉であり、つまり『人間』を意味する言葉だという。それが、和人（日本人）との接触がはじまって以来、いつの間にか嘲弄をこめた『差別』の呼称となった。
その、偏見や差別はいまだに消えない。北海道旧土人保護法という法津がある。明治三十二年に帝国議会を経たもので、その名称のとおり、旧土人（アイヌ人）の保護を目的とした法津で、それがいまなお残存している。調べてみると、今日的にはまるで悪法で、しかも殆ど運用不可能

な陳腐な死法なのだった。

わたしは態度を改めて、正面からアイヌ問題に切りこんでみようと決心した。けれども、アイヌ問題をタブーにし続けてきたこの社会で、わたしの企画はいつも会議にひっかかり、なかなか思うようにはいかなかった。

叙事詩（ユーカラ）を伝承する老婦人を紹介したり、アイヌ文化を保存し伝承しようと腐心する、アイヌ青年の姿をドキュメンタリーに組んだりしながら、この頃ようやく、アイヌ少女の差別の訴えを取りあげ、北海道旧土人保護法を番組に持ちこんだりしているのだった。

しかし、時として、アイヌ人の実像と虚像が錯綜する、渦のような障害に突きあたって、その都度、わたしの立場、つまり報道人としてのわたしの、アイヌ問題に係わる姿勢というものが、確乎たる位置に据えられていないことを知らされ、同時にそういう自分の仕事の仕方に、いつも不安と恐れを感じなければならなかった。

シャクシャインの財宝などと、滑稽とも思われる話にまで首を突っこむわたしを、別のわたしは笑いながらも、しかし案外、なにかを掴み出す糸口になるかも知れないと考え直していた。

池内君は、わたしにすすめてくれたはずの皿の貝を、いつものように横取りして、芥子を存分に塗りつけて頬張り、もぐもぐと噛み、大きな眼に涙を溜めて鼻をつまんだ。

「ことの起こりはね。ごくありふれた、浮気旦那の調査依頼だったのです。この頃、旦那がどうも怪しいというのですよ、奥方が。二週に一遍くらい、二晩ほど家をあける。商用出張だというのだが、会社に問いあわせると、そんな予定はないはずだという。きっと愛人ができたにちがいない、ってね」

池内君は、周囲に気を配りながらたばこに火をつけて続けた。
「それでぼくは旦那を尾行した。まいったねえ。遙々と日高の国の静内まで行っちゃうんだな。その旦那。農機具を製造している会社の取締役社長なのだがね。なんてまあ遠方に二号どのを囲ったものだろうと思っているうちに、かの旦那は町を通り抜けてしまって、静内の川すじの農家で、アイヌの老人を一人乗せて、またまた奥へ突っ走るんですよ。通りの少ない田舎路を尾行するのは、骨が折れますからね。でも、意地になって突っ込んだら、かの旦那の車は、沢に掛けられた小さな橋の袂に乗り捨てられていた。沢の砂地に足跡を残していましてね。それはきみ、浮気なんてものじゃない」
池内君は、わたしの耳もとでひそひそと喋っていた口を噤み、唇の隙間から酒を吸い、幾分もったいをつけて、再びわたしの耳朶におでん嗅い臭を吹いた。
「そこでぼくは、その旦那の奇行にすっかり興味を覚えてしまって、色々と探索しているうちに、農機具会社の、彼の部屋の隠し金庫から、件の古文書を発見したというわけですよ」
「発見？……きみ、それは犯罪行為にはならないの？」
しいっ！　と、彼は大袈裟にわたしを制し、冷めたいおでんをうまそうに食べた。時計は既に十一時をまわっていた。
「もちろん、合法じゃないですよ。しかしぼくは、旦那の正式な妻君に調査を依頼されたのだし、旦那の奇妙な定期外泊の目的がわからないと、報告の仕様がありませんからね。それにぼくは盗みはしない。調査上の物件としてフィルムに撮っただけですからね」
妥当性はまるでないのに、なんとなく聞き手を錯覚させる言い方は、私立探偵という特殊な職



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

能のうちに育ったものかも知れなかった。
「それで、いったい、その古文書というのは、どんなふうなものでした？」
と、わたしは聞き耳を立てた。
「ひどいですよ、きみは。ぼくを窃盗犯呼ばわりしておいて、……それではまるで、故買ではありませんか」
酔いがまわったらしい池内探偵は、わたしの言い方に機嫌をそこねたらしく、大きな眼をすわらせて開き直った。
「いや、ごめんごめん。前言を取り消しますよ。しかしね。シャクシャインの財宝なんて、ぼくには信じられないのですがね」
と、わたしも構えてみせた。
「……まあ、聞けよ。その古文書には、判じ絵のような地図も描かれているのですよ。あれは、本物にちがいない。いや、本物だという証拠はないけれども、なんとなく、一種の勘でね。本物にちがいないと、ぼくは思うんだ。……きみ、二人で探しませんか。いや、もう一人、史実に明るい信用できる学者、いませんかね。きみなら知りあいがいるでしょう。三人で、あの旦那より先に埋蔵砂金を発見してしまいましょうよ。山分けということで……」
「なるほど、三人でね。でも、その財宝が時価数億円というのは？」
「それは……」
と、池内君はちょっと言葉を詰まらせた。
「埋蔵量を記した部分が、どうも不明瞭なんだけれども、おそらく、その位はあるだろうと、前

後の記述から、ぼくが判断したんだ」
「なあんだ。肝心なところはあて推量なのですか」
池内君は酔いが覚めたような顔つきになって、わたしを睨むようにした。
「きみは、はじめから、この話を莫迦にしているんだな」
「そんなことはないさ。……で、その、社長とかいう人は、まだ、シャクシャインの財宝を探しているのですか」
「ああ、……旦那の定期的な失踪は、実は極秘に属するビジネスでした、と、ぼくは奥方に報告してやったからね。いま、へたに奥方に本当のことを伝えて、騒がれでもしたら、シャクシャインの財宝がぱっと世間に飛び出しかねない。旦那の方は放って置いても、そう簡単に発見できないだろうし、それに間もなく雪に埋れて、来春までは探索ストップだ。その間にぼくらは、古文書を判読しようと考えたんだが、……よそう。きみには冷やかし程度の興味しかないようですからね。でも、いつか、ぼくはきみの眼の前に、さらさら、きらきら、砂金の山を積みあげてみせますよ。覚悟しているんだな」
わたしは、酔いつぶれそうな池内君を、瓜実顔の女将に眼くばせしてまかせ、勘定を済ませて居酒屋を出た。
三百年前のアイヌ酋長の財宝が、日高静内のいずこかに埋蔵されていることを記した古文書があるという。まったく無根とは言い切れない。もしそれが事実であり、しかも時価数億円にのぼる砂金が発見された場合、一体それはどうなるのか。
さらさら、きらきら、わたしの眼前に砂金の山を積みあげてみせると言った池内君は、実はア

イヌ人を、北海道におけるアイヌ人の存在を、また北海道の歴史に、アイヌ人がどのように関わってきたのかを、まるで知らないのではないか——。

そういうわたし自身も、シャクシャインという酋長、いや、酋長とは適切な言い方ではない。アイヌ語ではオッテナと言い、それは首長とでも訳すべきものだ。その、シャクシャインという首長のことになると、彼がどのような人物であったのか、なぜ反乱が起きたのか、まるでさだかではないのだった。

わたしは白い息を吹き、タクシーを探しながら、財宝のことはともかく、シャクシャインの反乱については、いずれ調べておかなければならないと思ったのだった。

## 2

翌朝、初雪が積っていた。狭い庭が朝陽に映えて、眼にしみるような白さだった。けれどもわたしは、久方ぶりの雪の白さと冬将軍の到来に感慨をもよおす先に、ふと、農機具会社の社長の、シャクシャインの財宝探しも、これでひと冬断念せざるを得ないのだな、と思い、池内君の突飛な話が、かなり深くわたしの脳裏にこびりついているのを、少々にがにがしく感じたのだった。

だが、わたしは、いつもより早く出社して資料室へ行き、北海道史や年表を調べた。

〝シャクシャインの乱〟は〝シャクシャイン一揆〟または〝寛文蝦夷之乱〟などとも呼ばれ、寛文九年（一六六九）六月に、シャクシャインが統治していたシブチャリ（現在の北海道日高支庁静内郡静内町）にその端を発したのだという。

はじめは、シプチャリ川（いまの静内川）を境として相対していた、オニピシという首長の支配するハエクル（西の人）と、シャクシャインが擁するメナシクル（東の人）との、部族間の抗争だった。

松前藩は幾度か両者を仲介したが、遂にはシャクシャインがオニピシを討ち、その鉾先は松前に向けられた。シャクシャインは、敵方であったハエクルはもとより、各地の夷人たちを糾合して次第に勢いを増し、やがて二千の大軍となって、砂金場や運上屋、番屋、商船などを次々に襲い、三百人あまりの和人を殺戮し、積荷や食糧などを略奪しながら、噴火湾沿いに松前へ進撃を開始した。

変報を受けた松前藩は、直ちに士卒をクンヌイ砦に送り、夷軍の進撃をそこでくい止めようとし、漁民・鉱夫まで募って雑兵に加え、銃座を敷いて迎え討った。弓矢・槍の武具に、木や鹿皮の鎧で武装した夷軍は、クンヌイ砦の銃座には抗しきれず敗退して、シャクシャインはその年の十月、松前軍の幕下に降り、和議の酒宴の席で謀殺された。夷人のほとんどを蜂起させたという、北海道の歴史上最も規模の大きかったシャクシャインの反乱も、わずか半歳に満たず松前藩によって鎮められた。と、概要を説明してあった。

シャクシャインが、砂金を埋蔵したというふうな事は、もちろんどこにも記されていなかったが、しかし、シャクシャインと砂金が、まったく無関係ではない。

シャクシャインの砦から見おろすシプチャリ川の上流で、多量の砂金が採掘されていたのは事実であり、シャクシャインの乱の三十六年も以前の、寛永十年（一六三三）に、既にシプチャリ金山が和人の手によって開かれており、また、シャクシャインの乱の前、そのシプチャリ金山の

坑首であった文四郎という人物が、藩命を受けてシャクシャインとオニピシの間に立って仲介の労をとったという記述もある。

だとすると、池内君の言う社長某が、ひそかに所持している古文書というものを、笑って無視することもできないようなのだ。

なおその史書に依れば、当時の金掘りたちは、主に東北地方から渡ってきた連中であったといい、一箇月につき一人あたり一匁の砂金を、運上金、つまり税として領主である松前藩に納めて、砂金の採掘をしていたというが、その採取量は、運上金のおよそ三十倍には達していたといわれ、一人一匁の実に微少と思える運上金が、坑首を通じて金山奉行に集められると「その取集る日は役所に渋紙四五枚しきて、砂金を取集めしむる内には、山の如く集りける」と板倉源次郎の『北海随筆』が引用されているのだった。

また、シャクシャインの乱で、シャクシャインに組した四名の和人がいたという。それは、鷹待と称する、松前藩独得の役職で、いわば鷹匠のような仕事に携わっていた者だった。士分ではあったが足軽程度、身分としてはかなり低かったようだ。鷹待というのは、つまり〝鷹を待つ〟という、お役目そのものから称された職名なのだろう。

蝦夷地の鷹は素性が良く、鷹狩りを好み、交歓の興とした当時の大名たちの垂涎の的だったから、松前藩は特別にその、鷹待と称する士分を設けて鷹の捕獲にあたらせた。鷹はことのほか警戒心が強いから、その仕事にはかなりの忍耐力が必要だったにちがいない。彼らは、広大な原生林にひそかに踏み入り、恰好の場所に構えてじっと鷹の動きを観察する。そして鷹の営巣の場を確認して歩き、やがて雛に育つのを待って捕獲し、訓練した。藩は、最も素性のよいものを将軍

家に献上するのを忘れなかったし、それは同時に蝦夷地の黄鷹の宣伝でもあったろう。
シャクシャインに組した鷹待は、史書にその名があげられている。越後の庄太夫・庄内の作右衛門・尾張の市左衛門・最上の助之丞という四名で、そのうち庄太夫は、特にシャクシャインと親密で、シャクシャインの娘と結婚し、アイヌ名でダットウインと名乗ったという。
乱のあと、彼は、ピポク（いまの新冠（ニイカップ））に陣を張った松前八左衛門に捕えられて、火刑に処されたというが、池内君の話した古文書が、もし事実だとするなら、その古文書を記したのは、あるいはその、越後の庄太夫だったかも知れない、と、わたしはいつの間にか、まるで無責任な空想を試みているのだった。
社の資料室では、その程度しか調べることはできなかった。
それからしばらくの間、わたしは、仕事に紛れてシャクシャインに係わる余裕を得られなかった。あの時居酒屋で、わたしの態度に気をそこねたのか、池内探偵からも、何も言って来なかった。
雪の季節にあわせた企画で、大学の低温科学研究所へ取材に行ったとき、わたしはふと思いついてカメラマンと車を先に帰し、同じ大学の経済学部を尋ねた。既に面識のある緒方教授の研究室が、その中にあったからだった。教授は、それが専門ではなかったけれども、地方史の、特にアイヌ関係では著名な人だった。
幸い、緒方教授は在室していた。
「シャクシャイン、ねえ」
と、教授は、唐突なわたしの質問に、ちょっと考えるようにしてから言った。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com